

〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

距離：コロナとともにある社会を考える

コロナ騒ぎが世界中を駆け回り、日本では「自粛」が強制される中、それでも日本では少しずつ収まりつつあることはとても幸せなことかもしれない。亡くなられた方々には心から哀悼の意を表したいと思うし、医療に従事されたり、介護施設で働いていたりする方々は、非常に高い緊張感の中、使命感だけで自分を支えていらっしやっただと想像し、頭が下がる。また、自宅で「自粛的生活」に挑んでいた多くの人々は、世界各国の感染状況や政策を比べてみたり、首都圏の感染者数が気になって、毎日の発表を確認してみたりと、しっかりコロナに浸らざるを得ない3ヶ月だったのではないだろうか。

「コロナ後の社会」「新しい生活様式」といった言葉が、緊急宣言の解除とともに耳しげく聞くようになった。私達が長い自粛生活から街に出ようとしたら、この言葉は私達の背中に張り付いてどこまでも一緒についてくる。もちろんこの言葉は、強烈な打撃を受けた経済活動の回復と、今後の継続的な感染防止対策の間に生まれた言葉であり、相反する側面のバランスを意味するキーワードであることはとても理解できる。

「新しい生活様式」はスーパーに買物に行ってみると実感できる。レジに並ぶ列が長く伸びている。それもそのはず、足元にはしっかりとマークが貼られ、人と人が接近することを拒んでいる。このマークとマークの間が「ソーシャルディスタンス」という耳慣れない「間隔」を意味しているようだ。この耳慣れない言葉と、あまり自分の内側にはなかった距離感を自然と受け止めていることに正直驚く。「強制的自粛」期間に、こうした自己規制を自然に受け入れてしまう素地が出来上がっているのかもしれないと、自分の心の中を覗きたくなる。でも、周りを見れば、どの人もごく自然にこの距離を受け入れているようで、逆にこの距離を守っていない人たちは家族か恋人であり、その関係性を誇示するようにさ見ええくらいだ。

こうした情景に自分自身も溶け込みながらも、少し違和感を覚え、「そんなこと言っただけ……」とすこし異論を唱えたくなる。(悪い癖です。)

ニュースを観ていると、学校の再開にあたってはこの感染防止策の徹底が求められているようだが、その中にこの「ソーシャルディスタンス」も含まれているようだ。感染防止に反対する気はまったくない。マスクや換気、検温や手洗いなどは絶対に習慣化するべきだと思う。ただ、教室の自分の机に透明な仕切りを建てさせている映像も紹介されていて、「そこまで？」と思うケースもある。これが「ソーシャルディスタンス」だと言われると、「できるの？」と疑いたくなるし、そもそも「徹底することが教育的なの？」という疑問すら出てくる。

まず、狭い教室に40人近い子どもたちをずっと押し込め続けてきたのは、国ではなかったか！ 35人学級の掛け声はすぐに消え、一人の教員が40に近い子どもたちを教えるという、「日本型の教室」が続けられてきた。そこには多くの問題が噴出しているものの、抜本的な見直しはついぞ聞こえてこない。コロナ騒ぎで「9月入学」が解決の手段であると提案されたとき、賛成者の多くが「9月入学がグローバル標準」という言葉を使っていた。いやいや、グローバル標準というのならば、まずはこの教室の「密」をなんとかするべきなのではないかな！？ 40人学級なんて世界標準からは大きくハズレている。当たり前に登校したら、マスクをしても、換気をしても、教室は密！ それなのに、「ソーシャルディスタンス」を求めるってどういうこと？ 本当にできるのだろうか？ 国は



コロナ対策の費用として、クラスを分散させるときに学校の教室が足りなければ、公民館などの施設を借りられるよう、その借り上げの費用を補助するとしている。なにか変！ コロナ騒ぎが去れば、すぐに「密集教室」に逆戻りですか？ 「これを機会に9月入学！」ではなく、せめて「これを機会に30人学級！」と叫んでほしいところだ。

もう一つ気になるのは、子どもの成長や発達において、「2メートル以上の距離を取る」ことって簡単に決めていいものなのか、ということ。子どもたちって、基本的

に体をふれあい、超密接な身体接触によって学ぶことが、子ども期には必要なのではないだろうか。人間がこれだけ大きな社会を形成できたのは、「共感力」によるというのが通説だ。つまり、社会性の基本は「他者への共感力」というわけだ。体をくっつけ合い、それこそ団子のような状態での接触によって、徐々に他者を受け入れ共感力を養っていく。それが子どもとしての成長だ。2メートル以上の距離を取りつつ、子どもたちの成長を求めることには大きな矛盾がある。幼稚園や保育園、小学校の低学年ではこの問題をどう整理するのだろうか。

そこどけそこどけコロナが通る……というわけでもあるまい。コロナ禍だからこそ、何を大事にするのかという視点を持ちたいものだ。そしてこのことは大きなステージで考えれば、「コロナ後の社会」をどう描くかということでもある。

コロナウイルスにとって生き延びやすい場所は、人口と流通が集中しているところだ。つまりは都会ということになる。都会には労働力の蓄積と消費の活発化という機能がある。そしてこうした都会と都会を結ぶシステムがグローバル化だ。この都市化とグローバル化は金融と流通を基に発展してきたと同時に、格差を広げ、世界を狭小なものに変えつつあった。しかし見事にこのコロナは国と国を分断し、金融経済をも破壊した。コロナの感染拡大に対抗する手段は、それぞれの国が殻を閉ざして人の行き来を止め、すべての活動を止めてじっとしているしかなかった。政治にできたことの基本は、ロックダウンと「自粛」でしかなかったのだ。そして強烈な経済的打撃もそこに発生した。

さて手も足も出なかったとなると、「コロナ後の社会」のイメージはそれぞれそれぞれに多様に描かれるはずだ。「何を変えるべきか」というポイントが人によって全く違うことになるからだ。例えば、医療従事者の方は、保健所の機能強化や病院の感染症ベッドの確保を考えるかもしれない。大企業の経営陣は、内部留保をしっかりと溜め込むことでこうした経済的危機も乗り越えられると考えるだろう。個人でサービス業を営む人々は、リスクの高さにこれからは二の足を踏むようになるかもしれない。

それでは、教育関係者が描く「コロナ後の社会」、または「コロナ後の教育」とはどのようなものなのだろうか。皆さんはどのようにお考えなのだろうか。

子どもたちは3ヶ月もの間、ただひたすら家にいることを求められた。友だちと遊ぶことも、学校で勉強することも許されなかった。家にばかりいるとストレスが溜まって、きょうだい喧嘩や親への反抗などもあっただろう。逆に親がイライラして、少しのことで叩かれたかもしれない。子どもたちのこうした「閉塞感」は想像に難くない。こうした現状を感じつつ、現在「コロナ後……」を語る教育関係者の言葉は恐ろしいほどに一致している。それは「ICT機器を活用してのオンライン授業」だ。これはこれでアイテムの一つとしてあっても良いと思う。しかし、教育関係者が、コロナを通して将来に「オンライン」だけしか描けないとしたら、それはあまりにも貧弱だろう。コロナを超えたとき次にはどのような可能性を見出すのか。

例えば、私は40人の同調圧力の強い集団としての学級に対する考え方を大きく変えるチャンスだと思っている。例えば、次に休校の措置があるのだとしたら、12～13人1学級、一日3部制といった学校形態なども面白いのではないかと考える。これくらいの規模なら感染対策は容易だ。3部制だから、3部目は夕方から終わりは夜になっているかもしれない。1部と2部の子どもたちはお昼の給食を、3部の子どもたちは夕食を一緒にするなんてのも面白い。学級集団の考え方も、大きく変わらざるを得ないであろう。文科省の言う「深い学び」には、これくらいの大きさの集団が適している。また、この人数であれば、帰宅後にみんなでオンラインでやり取りもできるだろう。

まとまらない話になってしまったが、「もとに戻す」ことはもう無理だ。何かを変えていこうとする意思がない限りは、コロナを超えたことにはならないのではないだろうか。

「コロナ後の社会」というテーマは、やはり重いものなのかもしれない。

6月～8月前半のEd.ベンチャーの学習会

学習会は、Zoomを使ってのWeb学習会で開催しています。参加ご希望の方は、担当者もしくは事務局に連絡をください。Web会議IDとパスワード、資料の受取方について、連絡させていただきます。

理論学習会 ●6月6日(土)13時～ 実践報告会：

支援が必要な子・弱い立場の子どもを周りの子との関わりの中で育む

授業研究会 ●6月18日(木)19時～ 内容：教師は伝達者ではなくいかにして媒介者たりうるか

外国人の子ども理解のための学習会 事例研究会 ●6月13日13時～ ●7月22日19時～

●6月23日(火)19時～ ピザ・在留資格を知る

●8月4日(火)19時～ ルーツ別の来日の経緯を知る

インクルーシブな社会を目指す学習会 ●6月24日(水)19時～ 二羽泰子氏企画学習会①：

合理的配慮と多様な子どもたちの学級づくりージレンマを乗り越えるためにー

【理事の一言】 ついに緊急事態宣言が解除された。ようやく学校に子どもたちが戻ってくる。登校日が決まり、その準備に職員は慌ただしく動いている。しかし、学校が再開しても、今までのようには過ごせない。感染防止策を取り、いろいろな所に注意を払わなければならない。学習や行事などで制限される活動も多い。いつもと違う生活に、子どもたちは何を感じているのだろうか。アンテナを広げ、子どもが出すサインを受け取って、気持ちに寄り添いながら、この期間を乗り越えていきたいと思う。(SM)